

アトモスフィア

生化学会と分子生物学会の統合

中 澤 淳*

研究の前線から身を引いて6年経過した。この間、ヒトをはじめ多くの生物の全ゲノム構造の解明が進み、生物学は様変わりしようとしている。しかし一方では、科学研究で不正問題が起これ、科学者の倫理観が問われ始めている。研究が肥大化し、科学者の個性が見えにくくなっているのではないかと思う。

現在、私が携わっているコメディカルの大学教育現場では、意欲、学力において様々な段階の学生に直面し、生命科学教育をいかに展開するか悩みが尽きない。生化学会教育委員会で取りあげた「ゆとり教育」の弊害は、現実に予測の通りに進んでいる。バーチャルリアリティの世界に棲むサイレントマジョリティを、どのようにわれらの後継者として育て上げるのか、真剣に考えなければならない。

今年、日本生化学会と日本分子生物学会が合同で第20回国際生化学・分子生物学会議 (IUBMB) を京都で開催し、盛会であったことは誠に嬉しい限りである。平成10年に私が生化学会副会長として、石村巽会長とともに本庶佑教授にこの大会の会頭をお願いして学会開催を決めたのは、これを契機にこの2つの学会が一体化することへの願いをこめてのことであった。生化学会は大正14年からの歴史があり、医歯理農工薬と理系全学部の先生方による善意の運営が続けられてきた。分子生物学会は生物物理学会から分離して28年前に発足したが、当初は同好会的な色彩が濃かった。しかし、会員が1万人をゆうに超えることになった今日では、学会の社会的責任から公益法人としての活動が要請されている。社団法人の経験をもつ生化学会と新進気鋭の分子生物学会が合体して、新たな生命科学の学会を発足させることは、これからのわが国の科学振興にとって大きな意味をもつと考える。

そのためにも生化学会には改善の余地がある。私は生化学会会長のとき「開かれた学会運営」を目標の一つに掲げ (生化学 70, 1369-1370 (1998)), 理事会の記録を逐一「生化学」誌に掲載し、また常務理事会の模様もできる限り会員に伝える努力をした。学会事務局の情報機能を高め、電子メールなどの即時性の通信手段を整えた。学会会計を公益法人会計基準に従って整理した。これらはすべて学会運営の透明性を高め、会員の意向が学会本部に反映できるようにしたいと考えたからである。これらの課題がその後どう展開していったのか、「生化学」誌やホームページからは伝わってこない。

私が会長のときに変えたもう一つのことは、代議員制導入であった。それまでは大きな会場で、わずかな会員の参加のもとに形式的な総会が行われていた。代議員を社団法人の社員とすることで、代議員会=総会とした。また、生化学会の特徴であった評議員制度を諮問機関として継続させ、代議員会と評議員・参与会を同時開催することで総会を実質的なものにした。横浜での旧形式最後の総会では、生化学会の伝統である直接民主制が崩れるとの懸念が出されたが、その後の円滑な運営に期待をかけて代議員制を決めた。現在、学会の議論が低調であるとしたら、その原因の一端がこのときの総会決定にあるのかも知れないと、当時の責任者として危惧する。歴代会長、会頭を始めとする学会役員の皆さんは、どのようにみておられるのだろうか。

「開かれた学会運営」なくしては生化学会の発展は望めないと考える。会員の意見交換を是非とも促して頂きたい。私も所属する米国生化学分子生物学会 (ASBMB) や米国微生物学会 (ASM) からは、毎月学会活動をわかりやすく記述した学会誌が送られてくる。これに習って「生化学」誌を見直し、情報誌として再出発することを願いたい。学会は触媒 (酵素) であるとは私は考える。触媒なしには研究活動の促進は望めない。学会活動についての生化学会内部での議論を沸き立たせ、分子生物学会の皆さんもそれに巻き込み、両学会を一元化するための『アトモスフィア』を作るときがきていると考える。

*東亜大学学長、本会名誉会員